

## ●春日部市民文化講座（第41回） 「茶会 ー茶事と大寄せの茶会ー」

◆日時：2022年12月7日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

## ■茶会 ー茶事と大寄せの茶会ー



今日、このテーマを取り上げたのは、私が茶の湯を初めて50年位経ちますが、「侘び茶とは何か？」と聞かれたら、ぼく自身がまともな答えができないからです。でも、「侘び茶」には惹かれていて茶の湯が好きなのです。だから昨夜も夜中の1時半に月を見たらお茶が飲みたくなるという、そのくらい好きなのです。その好きな「侘び茶」の中心に茶事があるのです。この間、私たちが催したような茶会、不特定多数のお客様をお招きして、それぞれ違う流派の方々が独自のおもてなしをして、それで終わる茶会もあります。お客様もとっても楽しんで帰ってくださるのです。でも、ぼくが表千家で習った茶の湯ではないのです。それは、茶の湯の中で、一つのプロセスというか、遊びというか、催しというか、それに招く側も招かれる側も参加して「茶の湯ごっこ」をしているようなものでしかなくて、ぼくは本当のお茶事をしたいのです。

本当のお茶事を経験すると、「アッ！ 利休さんたちが目指していた茶の湯ってこういうことなのか」って思えて、何て言えばいいのか、茶事を経験すると本当に生きていて良かったって感じられるのです。

## ◆日々の稽古は茶事に向かったの修行

茶事と茶会の違いということを最初にさりげなく申し上げましたけれども、ぼくたちがお稽古をさせていただいていることは、茶事に向かったの修行というか、学びなのです。ぼくが「茶の湯」を習い始めて3年間は、お薄も点てなければ、もちろんお濃茶も練らない、自分で茶筌を取ったことが無かったのです。ジッと皆さんのお点前を見て「ぼくは牧師だ、ぼくは茶の湯の批評家だ」と言って茶筌を取りませんでした。先生の処には15人くらいの人が習いに来ていましたが、見ていて面白かったですね。同じことを習っているのですが、みんなやっていることが違うのです。一番驚いたのは、同じお茶を使っているのに人によって味が違うのです。これは何だろうと思いました。牧師だからズバツと言いますが、結局、心の問題だと思いました。人格の問題、その人の人柄の問題、その人の仕事の仕方や生き方がその一服のお茶に現れるのです。これが3年間、黙って座っていて見出した私の結論です。

## ◆茶事の様相／茶事七式

鎌倉時代にお坊さんが中国から茶の木を持ち帰り植えて、それをあちらこちらでも植えて貴族や僧侶、有力武士たちに好まれるようになり、室町時代になると茶会が始まるようになります。そして室町時代後期から桃山時代になって「侘び茶の湯」が大成し、「茶事七式」と呼ばれるような形式が生まれます。

まずは「朝会＝朝茶」ですね。夏の朝の清々しさを愛でる茶会です。ですから寒い時期にはやりません。

次が「昼会、正午の茶事」というのが、ぼくたちが一般的にやる普通の茶会で、これは4時間かける茶事です。

次が3番目の「不時の会」です。これはしたい時に勝手にする茶会です。

4番目が「夜咄」です。これを好きな人が多いです。季節としては、今頃から来年の2月頃くらいまでですね。これが良いのはロウソクの明かりですね。広くても四畳半、狭い茶室の方が趣がありますね。

5番目の「跡見の会」というのは、茶会が終わって道具が出されるじゃないですか、会記が出されて、会記に書かれているものは一般的にはあまり出されない物なのです。そういう珍しい品を手で触れることのできるような茶会です。

次が「飯後会（はんごのかい）」です。これは、茶席では食事を用意しない会です。ですから、お客様が食事を終えた後の時間に来ていただく茶事です。そして1～2時間程度で自由に終わるお茶会です。

そして「暁会（あかつきかい）」です。「暁」は1月から2月の厳寒の時期に日の出前から始まる茶会です。

こういうことが室町時代後期から行われていたのです。そのくらい日本人はこういった感性を持っていたのです。

## 茶事と茶会の話し 【高橋先生のレジュメより】

はじめに

## 茶事の様相

## 1. 桃山時代に侘び茶の湯が大成した。

(室町時代後期から天文年間 1532-1555年)

## 1) 茶事七式

## (1) 朝茶

## (2) 昼会、正午(4時間)

## (3) 不時会 —— 臨時の茶事(あらかじめ企てて催したのではなく、不意の来訪を平素の楽しみのある含蓄のあるもてなし)

## (4) 夜咄会 —— 登記の夜間に行われることが普通

## (5) 跡見会 —— 会後の後、名物の拝見を所望し、亭主と客が余韻を楽しむ

## (6) 飯後会 —— 時間はずれの茶会(飯後のことを考えて午後1時、2時に招く客、亭主の都合で変化自在の茶事)

## (7) 暁会

## 2) 口切り、初釜、利休忌

表千家(3月27日)、菜の花が供えられる

裏千家、武者小路千家(3月28日)

名残 10月催される会(風炉の名残をしのぶ)

## ◆その他の季節の茶会

その他に「口切りの茶会」もあります。11月頃に茶壺からお茶を出して、それを石臼で碾いて抹茶にして飲むのです。茶壺を飾って眺めるということもあります。

正月に行われる「初釜」があります。

そして「利休忌」です。表千家は3月27日、裏千家と武者小路千家は3月28日に行われるのですが、何故か日にちが違うのです。日にちは違うのですが、いずれも花は菜の花なのです。これは良いですね。

「名残の茶会」というのがありますね。これは風炉から炉に変わるちょっと前の時期、10月頃に行われる茶会です。茶の湯では春夏秋冬の季節の変わり目を大切にしてきました。ぼくが茶の湯をやって良かったなあというご利益は「季節感」です。レジュメには「風炉をしのぶ」と書きましたが、「しのぶ」という感性はとても大切なおもてなしかもしれないですね。

## ◆独り茶会

もう一つ、ここには書いてないのですが「独り茶会」というのがあります。独りで茶を味わう会です。ぼく自身はもう30年位実践しているのですが、皆さんに今日はぜひお勧めしたいと思いました。傍に誰かがいたら「二人茶会」になり、3人まではありかなと思います。ここで大切なのは、主菓子とお干菓子をお茶とともにいつも用意しておくことです。茶碗は常用の茶碗でいいですから、おもてなしたいという気持ちが大切です。これはいつでもできますし、質素な茶事です。

## ◆茶会の歴史／南北朝時代の茶会

南北朝時代には、僧侶の玄恵法印という人によって『喫茶行事』という本が作られています。その中に3つの抹茶の振る舞いを書いてあるのですよ。その1は、「水織（すいせん、葛切り）」のこです。お菓子の葛切りです。酒と三献のおもてなしとお茶が出るのですね。次に、素麺を食べて茶を飲んだのです。素麺というのは、なかなかの優れたものです。最近汁の素もすごく美味しいものが出ていて、寒い時にも素麺を温かくして美味しく食べられるのです。素麺とお茶、これも悪くないです。3つ目が山海の珍物が出る食事と果物とお茶です。こうしたおもてなしが南北朝時代の書院で行われていたのです。

## ◆室町時代中期の「闘茶会」

次が1416年(応永23年)の茶会です。3代将軍足利義満の子、4代将軍義持の時代です。「闘茶会」です。「闘茶」というのは賭け事です。抹茶を飲んで、それがどこの産地のお茶かを当てるのです。それで大変な賞金が出るのです。そういうことを貴族が遊びとしてやっていたのです。そしてお茶と料理とお酒が密接に結びついてきて、外すことができないような茶会になってくるのです。この頃は、貴族とか僧侶とかによって茶会がサロン化していたのですね。

## ◆風炉の趣向

サロン化した茶が整理されてきて「茶の湯」が独立するのが利休さんの時代です。3の「風炉の趣向」です。お

お客様の前に台子が飾られ、そこには風炉が据えられて点前が行われるようになります。武野紹鷗が茶室に風炉を据えて点前を行ったのです。さらに、千利休は小さな囲炉裏を茶室に持ち込んで「炉」を作るのですね。

## ◆市中山居を構える

京都で応仁の乱(1467~1477年)が起こると、文化人たちは堺などに疎開するのですね。そんな中に武野紹鷗もいるのですが、堺で茶の湯を広めていって四畳半の茶室でお稽古したのですね。武野紹鷗の影響もあって、堺の町衆の人たちがみんなお茶をやるようになるのです。しかも「市中山居」と言われるような侘びた佇まいで。その弟子の一人が千利休だったのです。

## I. 茶会の歴史

## 1. 南北朝時代の茶会

客殿に会衆がより集いもてなす

『喫茶行事』玄恵法印作(1269?-1350年)

- 1) 水織(すいせん、葛切り) 酒と三献の儀礼
- 2) 素麺を食べ茶を飲む
- 3) 山海の珍物を食事、果物

## 2. 応永23年 1416年の茶会

- 1) 闘茶会
- 2) 茶料理と酒が有機的に結びついている
- 3) 貴族、僧侶を中心とする宮廷サロン
- 4) 音楽、芸能

## 3. 風炉の趣向

武野紹鷗は風炉上屋で茶会を行う

## 4. 市中山居を構える

数寄屋の茶会 堺の商人たちの間で流行

村田珠光、武野紹鷗、千利休の茶会

## 5. 1568年(永禄11年)

織田信長、足利義昭、

松永久秀(67歳没)、

洛中支配下で茶会が行われている

「九十九髪」 茄子形茶入れ ルイス・フロイス 4万クルザード以上の価値ありという

## ◆戦国時代の茶会

次が永禄11年、1568年のことです。織田信長、足利義昭に続いて松永久秀という武将の名前が出てきますが、この人のことをお茶の歴史の中では記憶に残しておいてください。この人は当時の文化人のトップです。そして、茶の湯に対して凄い造形のあった人物です。道具の目利きに関しては利休さんの前にトップだった人です。ただし、彼は織田信長と仲たがいをし、城と共に亡くなりました。

その前に織田信長がいます。信長という人は、室町幕府が滅びた後に、いかにして自分が天下人として何をしたら良いかということに鋭く見て考えていた人です。そんな信長ですので、みんなが見て「これは良いねえ」というような道具に対しても感受性は強かったのです。だから信長も目利きなのです。ぼくは信長の感性は、利休さんとそんなに違わなかったらと思うています。ですから、「名物狩り」と呼ばれるように名物と称される茶の湯の道具類を集めていたのです。それが、本能寺の変で一夜にして焼失してしまったのですから残念なことです。

## ◆茶会の構成／宣教師や医師の手記から

当時の堺の茶人たちの茶会の様子についてジョアン・ロドリゲスが書いています。ジョアン・ロドリゲスというのはイエズス会の宣教師で、自分が見たことやさまざまな宣教師たちが行っていたことを綴っては本部に送っていたのです。それが『日本教会史』です。彼自身は相当なインテリで日本文化を理解できる文化人でした。ここに書かれているのは、ジョアン・ロドリゲスが招かれた茶会の印象ですが、前段は露地における亭主と客人との無言での挨拶の様子が綴られています。今の茶事で行われる無言の挨拶で、もうこの時代にこうした形式が完成していたのです。

次に医師のルイス・アルメイダの文章では、堺の日比屋了慶の家でのお茶会の様子が詳しく綴られています。アルメイダは医師で修道士ですが、宣教師に負けないくらいの働きをした人です。日比屋了慶の家を中心にして堺や京都に出かけていたのですが、医者である彼自身が堺で病気になるのです。そして、彼の病気が快復した時に日比屋了慶がお茶会を開いてくれたのです。

ロドリゲスの文章やアルメイダの記録は、堺の町人衆が盛んにお茶会をやっていた頃の事を生々しく、外国人から見て茶の湯の世界が証言されているのです。

## ◆一期一会のころ

この「一期一会」がいつ頃、どこから出たのかというのは謎で、きちんと証明できる人は、今の学者の中にもいないと思います。もちろん「…だろう」はありますけれどもね。その「…だろう」で言いますと、山上宗二が「一期一会」という言葉をたぶん最初に使ったのではないかと思います。それは、『山上宗二記』の中で「茶道覚悟十躰(さどうかくごじゅつたい)」という処で次のように書いています。「路地へ入ヨリ出ルマデ一期二一度ノ会ノヤウニ亭主ヲ可敬畏(敬うべきなり)」と。「露地に招かれて入って、茶会が終わって出るまで招かれた客の心得は一生に一度限りのことだ」という緊迫感を亭主に抱きながら敬うべきである」というふうには言っているのです。

もう一人が私たちが歴史で知っている幕末の大老・井伊直弼です。彼は幕末を代表する茶人で、彦根城の城主でした。そんな井伊直弼が書いた『茶の湯一会集』という本の冒頭に「一期一会」の心構えを書いてあるのです。ここに書いてある言葉は深いですね。この「一期一会」というのは、茶会における思想哲学ですね。そして、利休さん以降、今日まで続けられている茶の湯の世界の指導者たちが大切にしている哲学ですね。

## II. 茶会の構成

## 1. ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』の中で、堺の町で茶会に招かれたときの印象が記されている。

「指定された日と時刻には、各人が清潔に礼儀正しく衣服を着て、俗人は頭の一部を剃り、隠居した者や坊主は頭髪と髭を剃り、新しい靴下をはいて、林のところに入るのに通る特殊な門へ行く。屋外にある門の前には、清掃して新たに水を打った空き地があり、塀もまたすがすがしさを感じさせるようにしてある。そして、一人のものが腰を十分にかがめてようやく通れるほど小さくて低い門(中ぐり)があり、その前に加工しないきれいな石が一つ置いてある。その所で、客人は中に入る前に、水を打ってこのうえなくきれいにしている通路の石を汚さないように林を通る草履のあたりをきれいなものに履き替える。その時まで、門が内側から閉めてあって家の主人が出てきてそれを開き、首だけを外にのぞかせそこから客人に歓迎の挨拶をして、貫木をささないで門を閉め、そこから茶の小家に出入りするのではなく、ただこの場合だけ使うために林の中につけてある別の特別な通路を通して家の中に引き返す。(『大公開時代叢書』)ロドリゲスはつづけて、亭主が迎付けに出て挨拶したあと引き下がっていったからの客の作法を書いていく。それによると、客は門を開いて中に入り、内から門を閉めるとそこにある台に腰かけて休息しながら林を眺める。そしてそこから途中にあるものを鑑賞しながら、林の中を通る小道を歩いて茶の家まで行く、と書いている。」

## 2. 医師ルイス・アルメイダの茶事の体験

日比屋了慶の家で……

## ◆横山梯子師の最後の茶事

いよいよ「むすび」です。ぼくが今回お話したかったのは、最初に学んだ先生の横山梯子先生のことでした。この方が若かった頃は、たくさんの弟子を引き連れてお家元の処とか、久田宗匠の処とか、美味しいものが食べられる処とか、あちらこちらに連れて行っていました。先生からは「あなたは牧師だから、こういう処を知っていた方がいいわよ」って言われてね。

そんな横山先生が、ぼくたちを教えている頃に交通事故に遭われてしまい頭を打ったのです。そのため、お年を召されてからは花の名前をみんな忘れてしまったのです。ご自身が生ける花の名前さえも言えなくなりました。それは、お点前にも言えることで、

お点前がほとんどできなくなりました。ですから、ぼくたち弟子に教える時も、「これでいいですかね」と確認されるようにすごく謙虚に教えていらっやいました。実際には忘れてしまっていて教えられないのに、一生懸命に教えようとしてくださいました。そうした中で、ある日、横山先生がぼくたちをお茶時に呼びたいとおっしゃって、15人ほどで招かれました。横山先生は、もうほとんどお点前はできないのですけれども、亭主としてお座りになって、ぼくたちに聞きながらお濃茶を練ってください、お薄も点ててくださいました。料理は柿傳、お菓子も京都から取り寄せてくださったのですが、ぼくたちが知っている茶事の世界とは全く違う茶事でした。だって、亭主がすらすらと進行できず、お茶を点てることさえもできないのですから。

でもその時に、先生は自分ができないことを恥じていないのです。花の名前さえも言えないことを全然恥ずかしいと思っていなかったのです。それこそ、これが本当のお茶人だなという姿をぼくに見せてくれました。「あるがまま」なのです。そして、何よりも楽しそうになさっていたのです。茶事が終わった後、先生は何も言わずに頭を下げていらっやいました。ただただ頭を下げていらっやる先生の姿を見て、「ああ、ぼくはこんな素晴らしい先生からお茶を習ったんだなあ」と思いました。ですから、梯子先生のことを思うと、ぼくもお茶事をやらなくちゃと思いました。その時は何人の方にお声掛けできるか分かりませんが、ぜひ来てください。

## ◆私の日々の茶の湯の修道

最後にもう一つ申し上げたかったことは、私自身の日々の茶の湯の修道です。これはぼくが毎日、お濃茶を練り、お薄を点て、それを自ら感謝していただくことです。三口半でお濃茶を頂くでしょう、その時にぼくは必ずお祈りが入ります。そのお祈りをして、お濃茶をいただいた後にお薄を点てて、今朝も飲みました。何故、こうした修道を毎日しているかというと、利休七哲の一人・高山右近という人がいるからです。

表千家の『江岑夏書(こうしんげがき)』(表千家4代・千宗佐(江岑)が1663年(寛文3年)に完成させた文章で、父の千宗且よりの聞書を中心に、利休以来の茶の湯について書き留めたもの)の中には、利休七哲では蒲生氏郷を第一とし、高山右近は二番目となっているのですが、私は高山右近が一番弟子だったと思います。それは、千家の再興に関して蒲生氏郷の功が大きいので一番としたもので、利休さんの「侘び茶」の心を深くしっていたのは高山右近だと思うからです。その証拠は、利休さんが山崎に国宝「待庵」を築造した際に、右近に柱の目利きをお願いして、右近から5本の柱が届いているのです。その令状が表千家に保存されています。つまり、利休さんの「侘び茶」の心を右近はその時既に知っていたのです。それだけ、高山右近という人は利休さんに近い人だったと言うことができます。その後、徳川の時代になって、高山右近は家財も茶道具もすべて捨てて身一つで、家族や宣教師たちと一緒にフィリピンに流されて到着後間もなく亡くなるのですが、彼は許される限り、どんな時でも自分でお茶会をしていたのだと思うのです。それが祈りであり、礼拝であり、彼の修行であったと思います。そうした右近の姿を思い、ぼくは毎日、お濃茶を練り、お薄を点てて、彼のことを思い、今日こうして皆さんと分かち合う時間に通じているのです。高山右近の「茶の湯」から見えることは、「もてなし」という修行を「最後に命の一滴までも注ぎ込んで他の人をもてなす」、これが利休さんが教えてくれた「侘び茶の哲学の神髄」かもしれませんね。

## Ⅲ. 一期一会のころ

1. 「山上宗二記」の「茶道覚悟十躰」では、茶会における客の心得を次のように述べている 「路地へ入ヨリ出ルマデ 一期二一度ノ会ノヤウニ亭主ヲ可敬畏」

## 2. 井伊直弼の著書『茶の湯一会集』にみる一期一会

「抑、茶湯の交會は、一期一会といひて、たとえば幾度同じ主客交會するとも、今日の会にふたたびかへらざる事を思へば、実に我一世一度の会なり、去るにより、主人は万事に心を配り、聊も僉末のなきよう深切実意を尽くし、客にも此会に又逢ひがたき事を弁へ、亭主の趣向何一つもおろかならぬを感心し、実意を以て交わるべきなり、是を一期一会といふ。」

## むすび

## 1. 横山梯子師の最後の茶事

## 2. 私の日々の茶の湯の修道

冒頭に、高橋先生から「本日のお話は日本人のもてなしの文化を考えることがテーマだ」とご説明がありました。